

## シベリア抑留を振り返って

和歌山県 若井 龍水

私は大正十二年九月二十八日、和歌山県日高郡龍神村で、若井薫・マキエの三男として出生。龍神尋常高等小学校から県立機械工訓育処に進み、和歌山市で一  
年研修。

和歌山県商工課技手補に採用されて、県庁勤務。

昭和十八年徴兵検査において第一乙種合格。

昭和十九年八月、静岡県三方原航空隊に入隊。同年

九月満州国嫩江飛行場警備隊第八八四部隊に転属し、新京で一期の検閲を終えるとすぐに遼陽飛行場へ部隊が移動し、飛行場警備の任に就いたが、動哨で一人警戒巡回をする時が一番心細かった。一巡りおおよそ一時間で回ってくるが、夜間は特に肝を冷やす。銃は持っているが空砲を装填しているだけで、呼笛を掲げての警備であったため、身のすくむ思いで度々緊張し

た。

終戦の詔勅のラジオ放送を全員で聴いて敗戦を知ったが、飛行場警備は続けた。八月末頃に主力が鞍山へトラックで移動するのに随行予定だったが、先行車両の一部が引き返して来て、賊に襲撃されたということ  
で移動を中止。遼陽に留まって武装解除を受け、奉天  
へトラックで移送され、作業大隊に編成替えされた。  
千人単位でまとめられた。十一月十一日、二段仕切りの有蓋貨車に一車両四十人ずつ詰められてシベリアへ送られた。四十人乗った貨車は、牛馬を移送させる貨物車の中央出入口にダルマストープが一台据え付けてあるだけのため、寒さで貨車の隅や換気小窓の付近には霜が厚く凍り付いて冷凍庫の中にいるような寒さだった。

何より困ったのは移送中の食糧であった。高粱や粟、大豆、玉蜀黍の粉末等を調理法の判らない兵隊炊事当番がやたらと炊き出してくれるが、時間も不定期で、二度の食事が同一停車時に遅れた分と定刻分が配られたり、二十時間くらい何も支給されない等、不規

則生活を強いられたので体調を崩す者が多発した。輸送中は、列車が停まるのを待ちかねて貨車の下で排便するのが忙しかった。レールの脇には戦友が先行した証の落とし紙が乱れ舞っており、糞は凍っていて臭気も感じなかったが大量に並んでいた。

途中で一度シャワー浴びがあつて、被服の熱気乾燥が同時に行われた。幾日貨車に乗っていたか日数が判らなくなる頃ハラグンというところで下車して、徒歩で収容所へ、先住者はルーマニア人とのことで入れ替えに収容された。

半地下式で、貨車の延長のような二段型で貨車二台分くらいしか収容できないほど小さな建物が、囲い内に数十棟並んでいた。室内は体臭とカビ臭さが漂つて、非常に陰湿で息苦しく感じた。中央にダルマストープが一台据えられていて、貨車輸送中と変わらぬ窮屈な起居だった。

入所して六カ月くらいは伐採と搬出に分かれて作業を命ぜられた。伐採班での作業によく出たが、二人曳きの大鋸と斧を使つての作業は大変だ。しかし搬出組

は更に重労働で、腕力に劣る日本人には辛いノルマで皆苦労したが達成できず、そんな中で入所二カ月くらい経たある日突然に中隊長の当番に選ばれた。所内作業で中隊長のお世話をしておれば良いので体力も回復した。

室内の照明施設が皆無のため、松の心材を割つて松明として焚いた。不寝番に立つと、ストーブ焚きと常夜松明番を順番に勤めた。深い雪と厚い氷の中での採暖は苦行であつた。また支給される糧秣が安定せず、米麦は次第に少なくなつて高粱、粟、大豆等の雑穀が多く、粃や皮付高粱等家畜の飼料と思える未調整穀物を受領したり等、調理にも苦労したが、体調を壊して栄養失調者が増えた。

暖かくなつて緑が美しい時季に、収容所を替えるため徒歩でハラグン駅に到り、輸送用貨車に乗せられてチタ市へ移つた。

チタの収容所は木造家屋で建坪も広い大きな建物だった。区切られた部屋にはそれぞれ壁ペーチカがあつて、集会広場は学校の講堂くらい天井も高く、広く

て、催し物や集会に使われた。室内は暗いながら裸電球が下がっていたが、相変わらずの二段棚で、一人分は毛布半分幅の七〇センチずつで窮屈だった。

チタでは最初に建築作業に出て煉瓦積みをした。三カ月くらいで炊事係に選ばれて、炊事の献立表作成役が一年くらい続いたから体力の消耗はなく楽な仕事だったが、皆に喜んでもらえる献立を考え、支給された現物で、一日量としては微量の油や粉等を一週間分ストックして日曜日に特別料理を提供したところ、喜ばれる一方で反感も出て、一日の定量を毎日使わず隠匿した罪が大衆裁判で批判され、炊事係も罷免された。もちろん交代した炊事係でも私の案が踏襲されて、特別献立で日曜も楽しませてくれていた。

次は電気工場だ。発電機の修理でコイルを巻き替えたり、配電工事で配線取り付け等に従事したが、日本の技術者は優秀で、仕事の上ではロシア人工場責任者に技術指導することが多かった。

ノルマは軽いものだったが、達成率を上げてその後の基準を高くされると他の作業隊に響くかもしれない

からと、常に一二〇パーセントの達成に止めたので、ここでの労働は時間的にも体力的にも余裕があった。

抑留三年目に入って、作業班の工場往復に警備員が付くこともなく集団で行動をしていた。また人員点呼も、入ソ当時は五列縦隊に並べて十人ずつを大声で数えながら前進させては途中で引き返させて再三数え直すので、寒い朝に人員確認だけに一時間近く立たされて辛かった経験からすれば、緩やかな管理に変わってきた。

また、この年にはソ連社会でも街頭に食糧品が出回っており、黒バンの枕を抱えた婦人や紙巻タバコを吸う男の姿を見掛けることが多くなり、作業場でロシア人からタバコをもらって吸うことも度々だった。またロシア婦人のスカーフがカラフルになって街が華やかだように感じたものだった。この頃には支給された石鹼をパンや古新聞と交換した。落とし紙の調達が毎日の主要な課題であり、古新聞の奪い合いでの口論や小競り合いは常時であった。塵紙支給が全然なかったのが苦労したものだ。特に痔を病んでいる者の悩みは深

刻だったので、目の色を変えて新聞紙を求め続けているのは痛ましかった。

昭和二十三年十一月、四度目の冬を迎えて、厳しい寒さが始まって一カ月くらい経た頃突然移動命令があって、貨物列車にダルマストープでナホトカに集結し、幕舎に収容された。

進歩分子による学習会が毎日開かれたので、使役に当たる以外は当直を残して全員参加させられ、「祖国帰還の暁には、日本共産党に入党して祖国の民主化に貢献しよう」とのアピールが続いた。

引揚船山澄丸で舞鶴に入港が十一月二十七日、上陸時に全身が真っ白くなるまで粉剤DDTを吹き付けられて呼吸が苦しかったこと。出迎えてくれた看護婦さんや婦人会の白衣姿が小人のように小さく目に映った。ロシア婦人の巨大な姿を見慣れていたからだろう。

復員手続きのあと、GHQの調査でシベリアでの作業状況等詳しい聴き取りを受けた。また帰村してからも警察官の来訪が度重なって種々質問されたのを思い

出す。

帰宅後は老父から雑貨小売業を継いで糊口を凌ぎ、結婚、育児、地域奉仕も人並みには務めてきた。

振り返ると五十年もの昔に、終戦から三年半も経て奇跡の生還と言われたものの、当人の感覚では兵隊勤務の延長期間に寒さと給与の悪さ、伐採作業の辛さや虱、南京虫のいるシベリア駐留があったような感想が残っている。お陰で私は、抑留中の作業箇所の当たりも幸運で、体力を温存して帰れたのは氏神の守護と感謝している。

鉄条網で嚴重に囲まれた中で、青春期に命を縮めて帰国の夢を頼りに労役に耐えてきた。

抑留中に無念の死を遂げた同胞戦友の遺骨收拾、慰霊に誠意を尽くしてくれるよう求めるとともに、二度と戦争を起こしてはいけなさと訴えたい。